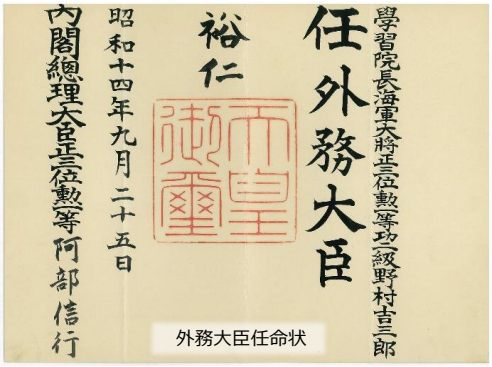
横須賀市立中央図書館郷土資料室

緒明山 通信 6

OAKIYAMA-TSUSHIN



外務大臣任命状

発行日
令和 2 年（2020 年）12 月 5 日
令和 3 年（2021 年）1 月 13 日改訂

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所　神奈川県横須賀市上町 1-61
電話　046-822-2077

本誌は印刷発行していません。市史編さん事業のホームページからダウンロードしてください。
☞ https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html

《 資料紹介 》

1941.6.4, ニューヨークにおける野村吉三郎祝賀会をとらえた一枚の写真

郷土資料室　佐藤明生

横須賀鎮守府司令長官や外務大臣等を歴任した故野村吉三郎氏の所蔵品の一つを紹介する（平成 17 年度寄贈）。

野村吉三郎は、明治 10 年/1877 年 12 月 16 日、旧紀州藩士増田三郎の三男として生れた。明治 28 年/1895 年に江田島の海軍兵学校に合格し、この頃、母の妹が嫁いだ野村正胤の野村姓を継いだ。

明治 31 年/1898 年 12 月に海軍兵学校を卒業し、「比叡乗組」を任ぜられたのを始まりとして、海軍さらには国政等の要職の数々をこなしていく。中でも、明治 34 年/1901 年 5 月 1 日に三笠回航委員として英国に渡り、三笠乗組員として翌年の 5 月 18 日に横須賀港に帰着したことをはじめ、オーストリア、ドイツ、アメリカでの駐在、大正 8 年/1919 年 2 月 5 日のパリ講和会議の講和全権委員随員、翌年 9 月 27 日のワシントン会議参列全権委員随員などの経歴は、国際派とも称される所以となっている。

その後、昭和 6 年/1931 年 12 月 1 日から昭和 7 年 2 月 1 日まで、昭和 7 年 10 月 10 日から昭和 8 年 11 月 14 日まで、それぞれ第 17 代、第 19 代横須賀鎮守府司令長官を歴任し、その間の昭和 8 年 3 月 1 日には海軍大将に任ぜられた。

昭和 12 年/1937 年 4 月 6 日に予備役となるが、その後も学習院長、外務大臣、駐米特命全権大使を歴任した。

戦後は、昭和 28 年/1953 年に日本ビクター社長

1941.6.4 ニューヨークにおける野村吉三郎祝賀会の様子

に就任。翌年、参議院議員（和歌山選挙区補欠選挙）に当選し、昭和34年/1959年に再選を果たしたが、在任中の昭和 39 年/1964 年 5 月 8 日に 86 歳で亡くなった。

本市としても、三笠回航委員、二度の横須賀鎮守府司令長官など、とても関わりの深い人物である。

さて、今回紹介する写真は、縦 32.5 ㎝、横 53.4 ㎝と大きく引き伸ばされたもので、写真の上部左寄りに次のようなキャプションが埋め込まれている。

BANQUET IN HONOR OF HIS EXCELLENCY
KICHISABUROU NOMURA
THE JAPANESE AMBASSADOR TO HIS UNITED STATES
TENDERED BY
THE JAPANESE CHAMBER OF COMMERCE
OF NEW YORK
THE WALDORF-ASTORIA NEW YORK
JUNE.4.1941

ニューヨークの最高級ホテル、ウォルドルフ＝アストリアにおいて、駐米日本商工会議所が発起人となり催された特命全権大使野村吉三郎の祝賀会であることを示している。

一目のとおりの大宴会である。主賓である野村は壇上の最前列中央に座しており、写し出された円卓を数えただけでも 40 卓はある。主賓・来賓を含め 500 人規模で催されたものであろう。

1941 年/昭和 16 年 6 月 4 日と言えば日米が開戦する半年ほど前である。野村は、大使を任命され 2 月にはワシントンに着いているが、旧知の間柄といわれるルーズヴェルト大統領との会見、そして実務的にはハル国務長官と頻繁に会談を行っていた最中である。4 月 15 日に第一案が完成していた日米諒解案は、日米間の友好関係の再開に向けて両者が共同責任を負うことを目的とするものであったが、以降、野村とハル国務長官の会談を折衝の場として両国の修正案が検討されていく。そして、米国側の最後通牒と解釈したいわゆる「ハルノート」が示されたのが 11 月 26 日で、その後も開戦まで合計で 46 回にわたる会談が行われた。この大宴会が催された 6 月 4 日の前夜も第 13 次会談のため野村はハル国務長官を訪問している。

日本商工会議所としてはあくまでも日米の経済協力の維持に向けた両国間の和解の願いを込めて野村の手腕にエールを贈っていたことであろう。米国の経済界としても決して日本との交戦を望むことはなかったことから、ウォルドルフ＝アストリアの“The Grand Ballroom”を満席にする盛大な宴席となったことがわかる。

それにも関わらず、翌月の米国本国内の日本資産凍結、日本軍による南部フランス領インドシナ進駐、そして、半年後の 12 月 7 日（日本では 8 日）、ハワイ・オアフ島真珠湾のアメリカ太平洋艦隊への奇襲攻撃によって、ペリー来航以来の日米の友好関係が途切れることになる。

ここで紹介した写真は、日米開戦回避を願う人々の集いを撮影したものである。写真という一瞬をとらえた記録は、その後の脈々とつながる歴史の中に反映させてみると様々な感情や解釈が芽生える。今、私たちはこの祝賀会の半年後の事態や戦禍に巻き込んだ諸国と自国の悲惨な運命を知っている。それゆえ、開戦を食い止められない流れの中で、そのことをまだ知らぬ人々が集うこの写真を眺めた時に、何か歯痒さのようなものを感じてならない。

追記　野村吉三郎所蔵資料は、ご子息の野村忠氏が保管されていましたが、忠氏ご逝去後、近縁の方と故平間洋一氏（元防衛大学教授）のご努力により呉市海事歴史科学館と本市に寄贈されました。呉市と本市は今年度、お互いの資料目録を交換し、これによりご子息に残された野村吉三郎所蔵資料の全体を把握できるようになりました。

参考文献

木場浩介　1961　『野村吉三郎』　野村吉三郎伝記刊行会

>>> お知らせ <<<

令和 2 年 12 月 5 日から 12 月 27 日まで、中央図書館 1 階ロビーで、ここで紹介した写真を含む郷土資料室所蔵資料ミニ展示会「野村吉三郎展」を開催します。

郷土資料室ミニ展示会「野村吉三郎展」～展示品一覧～

1　肖像画
2　海軍大将通常礼装（フロックコート・ズボン・ベスト）
3　旅行用トランク（K.N.イニシャル入り）
4　写真（1941.6.4 野村吉三郎祝賀会）
5　パリ講和会議記念品
6　表札
7　任命状・辞令書
　A）比叡乗組ヲ命ス（北米回航）
　B）英国出張被仰付（三笠回航）
　C）英国ニ於テ製造ノ軍艦三笠回航委員ヲ命ス
　D）八島乗組被免三笠乗組被仰付
　E）免本職補横須賀鎮守府参謀
　F）講和全権委員随員被仰付
　G）ワシントン会議参列全権委員随員被仰付
　H）任学習院長
　I）任外務大臣
8　その他、著作物等

≪特集≫

「旅する郷土史」

今年は、新型コロナウィルスの感染拡大の影響により外出の機会が減りました。未だ感染状況に収束の兆しが見えず、外出や旅行を控えている方も多くおられます。そこで、今回は「旅」をキーワードに、地域の歴史を紐解きながら、様々な時代を旅してみましょう。

❑ 鎌倉時代 ❒

源氏３代と三浦半島

郷土資料室　谷合伸介

三浦半島には、鎌倉に本格的な武家政権を樹立した源頼朝を初め、２代将軍頼家、３代将軍実朝と源氏３代がしばしば来訪しました。もとより、三浦半島は頼朝以前から源氏に従ってきた三浦一族の本拠地であり、源氏との縁も浅からぬ地域でした。鎌倉幕府の歴史を記した『吾妻鏡』には源氏３代が三浦半島を訪れたときの様子が記されています。

養和元年（1181）６月19日、頼朝は、納涼散策のため、三浦の地を訪れます。この時、頼朝一行を接待したのが三浦義澄を始めとした三浦一族でした。事前に準備を整え、特別な接待を行ったといいます。頼朝は、衣笠城の攻防で戦死した三浦義明の旧跡を訪れるなど、鎌倉に戻るまでの２日間をここで過ごしました。

頼朝は、建久５年（1194）閏８月１日にも三浦を訪問しますが、この時の目的は三崎に山荘を建てるためであったと記しています。ここからの海や山などの眺望は素晴らしく、興宴に適した地とされました。少し時代が下りますが、実朝が不慮の死を遂げ源氏が３代で絶えた後、４代将軍となった藤原頼経も三崎に出かけ、船を出し宴に興じましたが、その時の『吾妻鏡』にも「凡山陰之景趣、海上之眺望、於勝地無比類歟」（寛喜元年（1229）４月17日条）との記述があり、三崎は景勝地としてよく知られた場所であったことがわかります。

さて、建久５年（1194）８月１日の頼朝の三崎訪問の際には、妻の政子のほか、２人の子（のちの頼家、大姫）も同行しました。この時も義澄が接待し、お酒や珍しい食べ物などを振る舞いました。笠懸（かさがけ）（馬の上から遠距離の的を矢で射る競技）も連日行われ、また船中での興宴も大変賑やかであったようです。こうした時間を過ごしたのち、３日に頼朝は鎌倉に戻りました。

頼朝は三崎を大変気に入ったようで、同年９月６日、同６年（1195）１月25日にも三崎で宴に興じました。頼朝没後も、３代将軍実朝は、承元４年（1210）５月21日及び建暦２年（1212）３月９日に三崎を訪れ、頼朝と同様に船中での宴等を楽しんでいます。三崎は、代々の将軍にとって、風光明媚な景勝地として、また宴を楽しむ地として欠かせない場所となっていきました。

もちろん彼らは三浦半島の中で三崎だけを訪れていたわけではありません。建保３年（1215）３月５日、実朝は、お花見のため横須賀に赴き、これを三浦義村らがもてなしました。なお、この日のことについて、『吾妻鏡』は「将軍家（源実朝）為覧花御出于三浦横須賀」と記していますが、この記述は、横須賀という地名の初見史料とされています。実朝が、お花見のためにわざわざ横須賀まで訪れていることから、当時の横須賀はお花見のスポットとして、よく知られた場所であったのかもしれません。実際、鎌倉時代の別の古文書にも、当時の人が横須賀にお花見に訪れたという記録が残されています（『新横須賀市史 資料編 古代･中世Ⅰ』1507号）。

また、横須賀には、鎌倉時代末期、この地を押さえていた三浦貞連の支援により泊船庵という庵が建てられましたが、ここには後醍醐天皇や足利尊氏などが崇敬した禅僧夢窓疎石が移り住み、約５年間過ごしました。泊船庵は、現在の在日米海軍横須賀基地内の１号ドック付近にあったとされていますので、当時の横須賀とは、現在の楠ヶ浦周辺一帯が含まれていたと考えられます。横須賀は行き交う船を眺めながら、仏門の道に打ち込むことができるような海沿いの静かな地であったのでしょう。

（明治２年の横須賀湊）

一方で、三浦半島は、頼朝らの祈りの場でもありました。栗浜大明神（現在の住吉神社）には、文治元年（1185）正月に頼朝と政子が、また建久６年（1195）10 月には頼家が、それぞれ参拝しています。また、寿永元年（1182）８月 11 日、懐妊した政子の安産祈願のため、頼朝は近国の寺社に奉幣使（ほうべいし）（奉幣のため神社等に参向する使者）を送りましたが、芦名の三浦十二天（現在の十二所神社）もそのうちの一つで、佐原義連が奉幣使として派遣されました。翌 12 日に政子が頼家を無事出産すると、頼朝は御家人達から献上された馬を栗浜大明神や三浦十二天などに捧げています。

以上のことから、源氏３代にとって、三浦半島は、源氏恩顧の三浦一族の本拠地ということだけでなく、避暑地、興宴の地、祈りの場として、大事な場所であったことが窺えます。

今回ご紹介した『吾妻鏡』は、現代語訳版も出版されています。中央図書館でご覧いただけますので、ぜひご利用ください。

参考文献

『新横須賀市史 資料編 古代・中世Ⅰ』（横須賀市、2004 年）

❑ 江戸時代 ❒

江戸時代のお伊勢参り

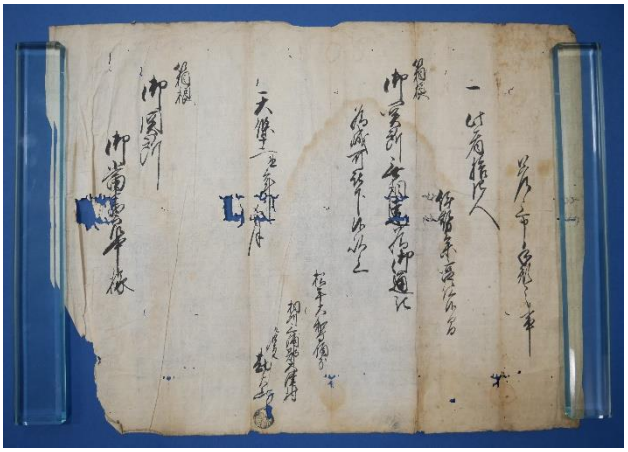
郷土資料室　谷合伸介

江戸時代の庶民にとって、伊勢神宮は、一生に１回は参拝したいと思う憧れの地でした。60 年周期でみられた集団参詣は、「おかげまいり」といわれ、諸国の民が大勢伊勢に向かったといいます。お伊勢参りには、旅費や滞在費の他に、昼食代や祝儀・賽銭代、遊興費など、相応の費用が必要で、各村では「伊勢講」を組織し、講員でお金を積み立て、その講員の中の何名かが代参するという方法がとられていました。

伊勢信仰を語るうえで、忘れてはならない存在が御師（おし）です。御師とは、遠方の信徒らのために宿泊や祈祷の世話をする人のことをいい、伊勢暦やお札を配るなど、信者を増やす地道な宗教活動を行っていました。三浦半島でも、伊勢御師の活動は盛んで、年末年始には御師が各村を回り、村人は初穂料を納め、それに対し御師は吉祥天のお札や伊勢名物で万病に効くとされる「万金丹（まんきんたん）」などを渡しました。秋谷村では、少なくとも、寛政・享和・文政の頃に、村人が伊勢神宮と西国社寺巡覧に出かけたことがわかる記録が残されています。このうち、享和３年（1803）の記録によると、40 名を超える大所帯で出発し、出発から約２週間で伊勢に到着、２日間をかけて伊勢を回ったといいます。

庶民が旅をする際は、諸国の関所を通行するために自分たちが居住する村の名主などから手形を発行してもらう必要がありました。中央図書館には、大津村の名主が発行した通行手形が残っています。

〈箱根関所の通行手形〉



（「小林家文書」横須賀市立中央図書館所蔵）

〈解釈文〉

差上申手形之事
一　此者拾四人
伊勢参宮仕候間
箱根
御関所無相違為御通被
為成可被下候以上
松平大和守領分
相州三浦郡大津村
名主　勘右衛門　印
天保十二丑年正月
箱根
御関所
御当番衆中様

天保 12 年（1842）１月、大津村の 14 名の村人がお伊勢参りを行いましたが、その際、村人たちが箱根の関所を通過できるように、同村名主の勘右衛門が通行手形を発行しています。おそらく大津村でも、伊勢講が組織され、その代表として 14 名が伊勢に向かったと思われます。関東の農村の講は、農閑期にあたる１月から２月に出立することが多かったといわれており、大津村も、農閑期を選んでお伊勢参りが行われたのかもしれません。

江戸時代、伊勢神宮には年間 60 万人を超える参宮者が集まったといいます。今回紹介した大津村の通行手形からも、当時、三浦半島から数多くの村人たちが伊勢の地に向かっていった様子が窺えます。

参考文献

『新横須賀市史 通史編 近世』（横須賀市、2011 年）

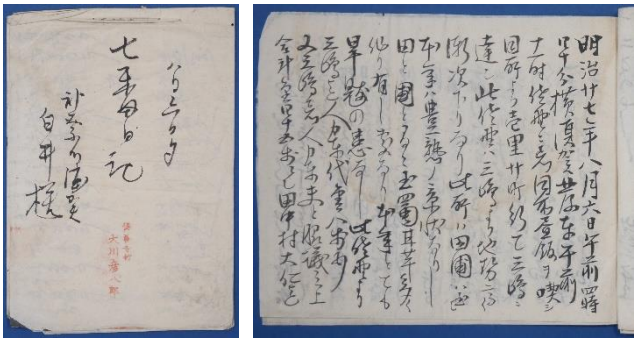
『江戸時代館』（竹内誠監修、小学館、2013 年）

❑ 明治時代 ❒

明治時代の鉄道旅

郷土資料室　谷合伸介

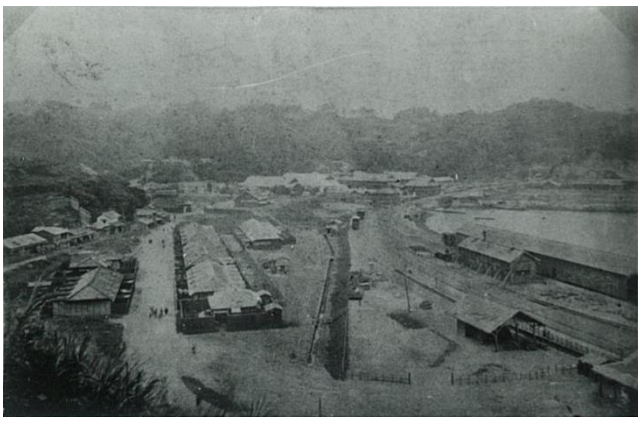
明治 22 年（1889）、横須賀線が開業したことにより、横須賀は鉄道網で徐々に各地とつながるようになりました。この鉄道を利用して、当時の横須賀の人は、どのような旅をしたのでしょうか。西浦賀の旧家に残る「七番日記」という古記録を基に紐解いていきましょう。



（「七番日記」白井竜太郎氏所蔵）

この「七番日記」には、明治 27 年（1894）に温泉旅に出かけた際の記録が残っており、前半は宿泊した宿での支払い明細、後半は旅先での出来事がそれぞれ記されています。いわば、前半が宿屋の領収書、後半が旅をした本人が記した紀行文といった内容です。今回は、主に後半の紀行文を基に見ていきますが、この記録には記主（日記を記した人のことをいう）の名が記されておらず、旅人の名もわかりません。そのため、ここでは旅人のことを「記主」と表記しておきます。前置きが少し長くなりましたが、早速詳しく見ていきましょう。

旅の始まりは、横須賀駅です。明治 27 年 8 月 6 日、記主は早朝の横須賀線に乗車し、温泉地の伊豆修善寺に向かいます。



（明治 20 年代の横須賀駅　横須賀市立中央図書館所蔵）

途中、大船駅で乗り換え、午前 7 時 47 分発の下りの東海道線に乗車します。ただ、当時の列車は、蒸気機関車で鉄道網も今ほどは発達していません。特に、当時の東海道線は、国府津から西は、山北、御殿場方面に抜ける現在の JR 御殿場線のルートで、それは箱根の外輪山の北側を通過する急勾配の区間であったため、蒸気機関車にとっては大変な難所であったといわれています。

こうした山間部のルートを通過しながら、記主は、佐野駅（現在の JR 裾野駅）で降車します。大船駅で乗り換えた東海道線のダイヤどおり順調に進めば、佐野駅到着は午前 10 時 30 分頃であったとみられますが、実際の到着は午前 11 時でした。昼食後、佐野から三島までの間を人力車で移動します。この間は、直線距離にするとおよそ 6 km 程度の距離ですが、さらに三島から大仁（現在の伊豆の国市）までの間、約 17km も人力車で移動しました。車夫と話し合いのうえ、決まったようですが、佐野からの分も合わせると約 23km 以上の距離を引っ張っていたわけですから、車夫の体力には驚かされます。今でこそ、人力車は、観光地で見かけるものという印象ですが、交通や通信のインフラが未発達であったこの時代の人々にとって重要な移動手段でした。明治 3 年（1870）に初めて製造許可を得たとされる人力車は、その後、都市部を中心に瞬く間に普及していったといいます。旅行をするうえでも、人力車は旅人の重要な足となっていました。

さて、佐野から三島までの人力車の運賃は約 8 銭、三島から大仁までの運賃は 45 銭で、合わせて 53 銭ほどかかりました。一方、鉄道の運賃は、当時横須賀駅から大船駅までの最も安価な下等運賃で 10 銭、また大船駅から佐野駅までの下等運賃は 51 銭でしたので、少なくとも片道 61 銭程度は、かかっていたとみられます。1 銭は、当時の物価水準及び賃金

水準に合わせると現在の 200 円（１円は現在の 20,000 円）程度に相当するといいます。あくまで目安でしかありませんが、人力車と鉄道を合わせた片道 114 銭の交通費に 200 円を掛け合わせると横須賀から大仁までの交通費は、現在のお金で 23,000 円程度であったということになります。

その後、大仁から修善寺村までの約５㎞の距離は徒歩で向かいますが、目的地の修善寺村に到着したのは 16 時 20 分で、すでに夕方になっていました。無事、修善寺に着いた記主ですが、ここから宿探しを始めます。その際、「病気なとにハ石の湯に限る様に心得候なり」と記し、その後、８月 25 日までの２週間以上の間、修善寺に滞在していたことから、この旅の主目的が湯治であったことが窺えます。記主は、「石の湯」に近い宿として３件の宿を候補としましたが、そのうちの一つであった大川彦八郎の宿に無事宿泊することができました。修善寺では、旅人への宿引（やどひき）は無かったようで、自分で宿泊等の交渉を行いました。滞在中は、「退屈したりとも見る所なし」と記すなど、かなり時間を持て余していたようですが、修善寺周辺の観光も行っており、修善寺奥の院、源範頼の墓、源頼家の墓、岩屋観音、大平の瀑布、龍泉寺、妙国寺などに出かけています。なかでも、記主の印象に最も残ったのが、狩野村大平の瀑布です。記主は「朝日瀑布と云」とも記していますが、現在の旭滝とみられます。この滝の落差は 105ｍあるようですが、記主はこの滝を見て「七段におちて 寔（まこと） ニ美事と見ゆるなり」と絶賛しています。

さて、２週間以上の宿への滞在では「食」も大変気になるところです。伊豆地方は、海に近く、またこの年は作物の実りも豊かであったようで、旅館では様々な食事が提供されました。ご飯や汁物の他、例えば、お刺身、酢漬け、瓜揉（うりもみ）、煮染（にしめ）、魚の煮つけ、おでん、鮎のうま煮、鮎の塩焼き、玉子豆腐、玉子焼きなどです。朝昼晩の１日３食が提供されていたため、当然重複するメニューも出てきます。特に、お刺身などは、ほぼ毎日提供されています。現在のような冷蔵施設がないなかで、新鮮な魚を毎日提供することができたのは、伊豆地方が魚介類の宝庫であったことを示すものともいえましょう。

こうして、18 日間の滞在を終えた記主は 25 日に修善寺を出発、佐野の平松で１泊後、鉄道で横須賀に帰りました。

修善寺の大川彦八郎の宿での滞在費は、合計で約５円７銭程でした。先程と同様に１円を 20,000 円程度と換算すると、およそ 100,000 円少々の滞在費がかかったことになります。湯治を目的とした旅行であるため、単純な比較はできませんが、食事が３食提供された滞在費であることを考えると、18 日間で 100,000 円少々という滞在費は、決して高額という程ではなかったのかもしれません。

江戸時代の庶民の旅は、徒歩で目的地まで向かうということが基本でしたが、明治時代になると鉄道や人力車など、様々な交通手段で目的地まで行くことができるようになりました。今回、ご紹介した「七番日記」は、そうした当時の旅の行程を伝えてくれる大変興味深い史料です。

最後に、執筆にあたり、白井竜太郎氏から史料のご提供をいただきました。この場をお借りし、心より御礼申し上げます。

参考文献

『汽車汽船旅行案内』（庚寅新誌社、1894 年）
『神奈川県史 通史編４（近代・現代１）』（神奈川県県民部県史編集室、1980 年）
『新横須賀市史 通史編 近現代』（横須賀市、2014 年）
『明治の金勘定』（山本博文監修、洋泉社、2017 年）

あとがき

今号では、郷土資料室ミニ展示会『野村吉三郎』展に合わせて、展示品の一つを紹介すると共に、≪特集≫「旅する郷土史」を掲載しました。

この特集は、鎌倉・江戸・明治の各時代の資料から「旅」をキーワードに地域の歴史を振り返りました。「源氏３代と三浦半島」は、図書資料として利用できる『吾妻鏡』から、「江戸時代のお伊勢参り」は、中央図書館所蔵の歴史資料から、「明治時代の鉄道旅」は、市史編さん事業の際に調査をさせていただいた個人所蔵の歴史資料から、それぞれご紹介しました。コロナ禍が一日も早く収束し、誰もが旅を楽しめる日常が戻ることを願ってやみません。今後も『緒明山通信』では、様々な郷土資料をご紹介してまいります。

お詫びと訂正

令和２年 12 月５日付で発行した本紙３頁に掲載した写真に誤りがありました。慶応３年の横須賀（楠ケ浦）の写真として掲載しましたが、正しくは同年の榎戸湾でした。令和３年１月 13 日付で誤って掲載した写真は削除するとともに明治２年の横須賀湊の写真に差し替えを行いました。お詫びと訂正をさせていただきます。